

～ 東京バレエ団『海賊』公演によせて～  
薄井憲二バレエ・コレクション常設展

vol. **71**  
『海賊』1

展示期間 /  
2019年2月14日(木)～3月17日(日)  
(※ 休館日はwebでご確認ください)

企画・構成 /  
関典子(薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

2019年3月23日、東京バレエ団『海賊』公演にあわせ、本展では2回にわたり、バレエ『海賊』をご紹介します。

『海賊 (Le Corsaire)』

- 〈振付〉 ジョゼフ・マジリエ  
〈音楽〉 アドルフ・アダン (のちにチェーザレ・プーニ、レオ・ドリーブ、リッカルド・ドリゴ、オルデンブルグ侯爵などの曲を加え、編曲)  
〈原作〉 ジョージ・ゴードン・バイロンの詩『海賊』  
〈台本〉 ジュール＝アンリ・ヴェルノワ・ド・サン・ジョルジュ、ジョゼフ・マジリエ  
〈構成〉 全3幕 (プロローグ、エピローグ付き)  
〈初演〉 1856年1月23日パリ・オペラ座  
メドーラ役: カロリーナ・ロザティ  
コンラッド役: ドメニコ・セガレッリ

海賊の男たちと、奴隷市場に売られる娘たちをめぐる物語。エキゾチックな舞台を背景に繰り広げられる波乱万丈の冒険活劇が、遠い異国へのロマンを掻き立てる。登場人物が多い上、誘拐、救出、策略、裏切り……と、目まぐるしく展開し、物語はかなり複雑。ギリシャ人の若い娘メドーラは奴隷として、好色なトルコ総督サイドに売られそうになるが、颯爽とした海賊コンラッドに救われ、2人は恋仲になる。その後、メドーラは再び捕らえられては助けられ、サイドのハーレムでは競い合う愛妾同士が策略を弄し合い、海賊たちは仲間割れし、最後に船が難破し、幸福な恋人たちだけが生き残る。

マジリエ以前にも、F.D.アルベール振付、ロベール・ボクサ音楽による版があり、これは1937年にロンドンのキングス劇場で初演されたが、マジリエ版の陰に隠れてしまった。ジュール・ペローは(マジリエ版に基づき)プーニの音楽を加えて、1858年にサンクトペテルブルクのボリショイ劇場で自分の版を初演。マリウス・プティパがコンラッドを踊る。この時プティパは、オルデンブルグ侯爵の音楽によって「奴隷たちの踊り」

を振付。プティパは妻マリー・プティパのために、1868年、ドリーブの音楽による「生ける花園」の場を含む新しい版を上演。1899年、プティパはマリンスキー劇場のために(ドリゴとミンクスの曲を加えて)全面改訂し、ピエリーナ・レニャーニがメドーラを踊る。これが最も重要な上演で、その後のロシアの版は全てこのプティパ版に基づく。1912年、ゴルスキーによるボリショイ版は、特に成功を収めた。

第2幕で踊られるメドーラと奴隷のアリのグラン・パ・ド・ドゥ(コンラッドを含むパ・ド・トロワの版も)は、最も技巧の見せ場に富み、ガラ公演の人気演目となっている。全幕版の上演は、ロシア以外で上演される機会は少なかったが、近年、再評価が進み、各国で頻繁に上演される傾向にある。

薄井憲二『バレエ千一夜』(新書館1993)より

『海賊』は最初、パリ・オペラ座で上演された。ロマンティック・バレエの人气がそろそろ下火になる頃であったが、この作品はナポレオン3世の台臨を仰いで華やかに初演され、大成功を博した。感激したナポレオン3世は「これほど美しく、感動的なバレエは今まで見たことはなく、これからも見ることはないであろう」と賞めたと伝えられる。(中略)

プティパは、1863年に自作としてこのバレエを改訂上演し、成功した。これを初めとしてプティパは何度も改訂版を上演しているが、いつもそれは大成功を収めた新作の後であった。例えば、最後の版は1899年だが、これは『眠れる森の美女』(1890年)、『白鳥の湖』(1895年)、『ライモンダ』(1898年)という3つの超大作の後に当る。チャイコフスキー、グラズノーフの高雅な音楽に彩られた大作の後にも、なおこのバレエに対する要望があったということは、当時のペテルブルグのバレエマンの嗜好がうかがえて興味深い。

主な出展リスト

- ◆バレエ台本/マリンスキー劇場/ロシア/1899年(LT-15)
- ◆バレエ台本/ボリショイ劇場/ロシア/1898年(LT-43)
- ◆アンティークプリント(手彩色)/カロリーナ・ロザティ/初演メドーラ役/「オペラ座のダンサー達: 主役級ダンサー達の衣装」/フランス/1850~1860年代(AP-252-2)
- ◆楽譜/アドルフ・アダン作曲/ロシア/1999年(SC-66)



兵庫県立芸術文化センター

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22

tel: 0798-68-0223 fax: 0798-68-0212

※ 禁無断複製・複製・引用